

第 1 1 回会議で出された主な意見

【北九州市の目指す子どもの未来をひらく教育（理念）について】

（目指す子ども像に関する視点）

北九州とすれば、行政、教育委員会、現場の先生、そして家庭など、北九州市民をあげて、1つの目標として北九州の人づくり、また、10年後の北九州は変わっていくのだという視点でとらえるべき。人づくり、人なくしてまちづくりはできないと思う。

北九州市の目指す子ども像で「北九州っ子」という表現に抵抗を感じる。また、北九州の子どもが全部「北九州っ子」ということに関しても、なんとなく抵抗を感じる。

人がいなくてもものづくりはできないという観念で、北九州の子どもたちはどういう大人になってもらうのか。10年後なので子どもではなく、10年かけて子どもが成人になって、北九州の若者として日本全国、そして地域、地球上で活躍できる大人、若者に育てる。その教育というのは、目的ではなく、1つの手段として、北九州あげて大人というか、青年をつくってあげたいと思う。

先生もあと1歩の努力を現場でしてほしい。また、一番大事な家庭が本気になって子どもの教育を目指していく。そして10年後に私たちの子ども、孫たちが本当に誇れる子ども、青年になり役に立つ。そういう大人になってもらうための教育であるべき。

「北九州っ子」という観点では、「自立」と「共生」とは書くべきではないと思う。「よく遊び、よく遊べ」などのキーワードが入ってくると、「北九州って、子どもたちが非常に楽しく遊んで、学校や地域や家庭がみんな、親も先生も地域の怖いおじさんたちも、みんな遊んでいいと言っている。だから僕も頑張ろう。僕も北九州のために何かやろう」となるのではないか。北九州を誇れるような子どもたちになれるのではないのかという気がする。そうすれば、3つの関係（学校・家庭・地域）も引き立ってくると思う。

「北九州っ子」は、「自立」と「共生」、「北九州の社会資源を生かし、人の力、まちの中ではぐくむ」という、3つの中から出てくるイメージで考えてみてはどうか。北九州は、市として環境首都などを踏まえ展開しているので、国際、あるいはアジアを意識し、環境や資源等に理解があり、国際的にもいろいろな人たちと意見を交わせるような、さまざまな集会や対話がプラスアルファで付加しているなどのことを積極的につくっていくというのが、一つの「北九州っ子」のイメージとしてもいいのではないかと思う。

「北九州っ子」で、「自立」と「共生」というのは、非常にバランスが取れていいと思っている。普通、「自立と調和」というような考え方を持っているが、「調和」というよりも、「共生」という言葉がいいと思う。

「北九州っ子」については、少し引っかかっている。行政は「北九州方式」という話をするが、実際、機能していないことがたくさんあると思う。暴力団や生活保護のことなどを考えると、九州で育つたと、胸を張って言えるようなまちになっているのかということが、その言葉の中で引っ掛かる1つの要因となっている。

「北九州」という言葉については、少し引っかかるという意見に半分ぐらい賛同するが、10年後の目標を掲げて向かっていくという意味では、北九州という名前が付いていると、現時点では悪いような印象なのだが、それを変えるんだという目標を掲げてやるのであれば、いいのではないかと思う。

「乗り越え、自立する力を持つ子ども」と「思いやりの心がある子ども」については、読んだらすごくいい言葉だが、後ろ向きというか現状の否定となっている。今、そうならないからということを出ているような気がする。行政が、目標を制止しようとしているという感じを持ち、特に自立についてはそれでいいのだろうかという気がする。

教育というのは、義務教育あるいは高校、大学と、自分がやりたいことを見つける期間だと思っているので、何か北九州で教育を受けている間に、そういうような夢を持ち、その実現をする。先生方は、それを手助けするというような感じのものが出せたらいい。それが、北九州の教育の特性ということになればいいのではないかという気がする。

「北九州っ子」で「自立」と「共生」と出ているが、例えば「北九州っ子」を「博多っ子」として考えたとき、北九州市らしさや特徴などがこの中に入っているのだろうかという疑問に思う。市政の中で、「アジアに開かれた子ども」があるので、何かそういうことを含めた形で、もっと北九州らしさ、目指す子ども像が出てくるのではないかと思う。

「北九州っ子」という言葉については、北九州の地域性はもちろん考慮しないといけないうが、恐らく、北九州であろうが、どこかほかの地域であろうが、目指すところはそんなに変わりはなく、登り方が少し違うので、どこから攻めていくかということだと思う。

「自立」という言葉は過去の会議で話し合われており、継承という意味では使ってもいいと思う。ただ、北九州方式の文言を見ても、「問題に突き当たったの自己判断と自己決定で解決すると共に」など、少し自己責任度のようなものが見える気がする。

「共生」も、北九州の、アジアの地域性を考えた時に、本来「共生」というのは異質なものであり、異なるものとの共生ということで、内なる異文化の問題など、そういうことまで踏み込んだ行政は、少しその辺りの説明をすることが必要ではないか。

下の絵でも、子どもを中心として、その子どもを第1次的養育責任が家庭にあるとした時、その家庭とそれを支える行政、地域とのかかわりで、この絵の描き方をどう考えるかによって、家庭と学校と地域のすき間、間がいっぱいあるような絵となっている。この間が一体その子育て共同体ということが本当に実現した姿としてあるのか、それぞれが、その役割になっていて、役割というのは恐らく期待の裏返しであるが、委員により考えが随分違う。まだうまく描けていないという印象を持っている。

明るいイメージを付けるのに、例えば、「目指す未来の北九州っ子」だとか、希望が持てるような感じのキャッチフレーズなどが欲しいという気がする。

「自立」については、背景には、自立できていない大人が多いという部分も多分にあると思うが、少し表現が固すぎるような気がする。もう少し分かりやすい表現にしたほうがよいと思う。

(学校に関する視点)

一流大学に行った方の話を聞くと、必ずいい先生に出会っている。「あの先生がいたから、勉強が好きになった」ということがあるので、魅力ある教師づくりというか、先生自身が人間的に魅力のある先生ができるような形の方策をとるべきだと思う。

学校、家庭、地域という三者の連携はもちろん必要だが、まず、学校での教育をきちんとすることにより、はじめて家庭での親を指導できると思う。やはり学校、家庭、地域では、学校が上にきて、家庭と地域が下にくるという構成にすべきではないか。

家庭が上だとか学校が上だとか、そんなこと関係ないと思う。子どもがいて家庭があって学校があって地域と、この3者で支えるべきだと思う。学校が家庭、親を教育するというのは間違っていると思う。

学校現場の対応という点では、学校は、教育委員会からも言われているからということではなく、組織として対応している。トップダウン、ボトムアップを確実にやり、小さなことでも管理職へ報告し、主任・主事に指示をしながら個別に対応している。

縦のラインと横のラインが機能するように、校長だけではなく、主任・主事なる者が、その意識を持っておけば、十分対応できると思っている。

教員は力量のある方だと思うので、もう少し研修をうまくすれば、もっと子どもに対していい対応ができるのではと思う。それでこそ、自主性が尊重され、自立して、思いやりのあるような子どもに育てられると思う。

小学校現場を預かる者として、各担任、いろんな課題・問題等が出た時に、1人で抱えこまないというようなことを大前提にしている。保護者に直接指導するとかいうことではなくして、子どもの言動とあるいは指導支援の在り方等を通して保護者に分かっていただくというようなスタンスを、常にとっている。

(家庭に関する視点)

子ども、家庭での親の方向性とかいうのもいろいろあるが、恐らく子どもの教育の中で、両親がものすごく大事な部分が7割くらいあるのだと思う。

私も含め、親御さんたちは概ね若い。初めての子育てなどの家庭もたくさんある中で、「しっかり向き合う」のはいいが、「しつけをする」という表現は少し引っ掛かる。「子どもと一緒に成長する」などの表現がいいのではないか。3人家族なども、構成の中は子どもが3分の1。だから、家庭と子どもを別にして、家庭がしつけというよりも一緒に成長するみたいな姿勢で理念図を作ったほうが、よりいいのではないかと思う。

家庭に関しては、「しっかり向き合い、しつけをする」というのは、子育てしている立場から、もう少し文言の工夫があってもいいのかという感じがする。

地域には、学校を支え、家庭が力いっぱいなど、学校のほうも家庭や地域に開かれたというイメージがあり、そういった中で、「相互の連携」ということでうたっている。

家庭の中では、家庭は家庭だけで独立してしつけをちゃんとするというような文言になっており、少し検討が必要かと思う。連携などをイメージすると、例えば、「周囲に支

えられ、学校や地域に参加し、子どもの心と生活を支える」、「周囲に支えられ、学校や地域に参加し、子どもの心と生活を支える」など、文言も検討してはどうかと思う。

「子どもを育てる 10 か条」は非常にいいものと思う。「子どもを育てる 10 か条を推進し」という表現が入れば、知らない人は、「それ、何だろう」と 10 か条を見る機会になる。まずこの文言を入れ、その後「地域や学校の連携」という文言にいくべきと思う。家庭には家庭の、子どもをどのようにしたいかということがあるので、それを、行政が作ったものをみんなで守っていくということは、あまり賛成しない。

子どもは、やはり親が責任を持ってしつけていくということが必要であり、家庭でしなかったら、誰がするのか。ほかの人に任せるとするのは少し無責任過ぎるような気がする。「しっかり向き合って、しつけをする」という言葉は、このままでいいと思う。

「子どもと生活を支え合い」だとか、柔らかい文言のほうがいいのではないかと思う。しかし、今日的な課題としては、やはり生活習慣の問題、やはりしつけの問題、これはものすごく大事な部分があるということを押さえないといけない。

6月に福岡市で「早寝、早起き、朝ごはん」等に関する講演があったが、大事なことは、生活習慣だと。方法が正しければ、学力は飛躍的に向上すると。県教委も似たことを言っているが、やはり、学力向上だけの問題ではなく、子どもたちが元気で精いっぱい力を発揮できるような条件。この条件支援整備の基礎は、やはり好ましい生活の在り方だと思う。「好ましい生活」とか、少し柔らかい言葉が入るとよいのではないか。

家庭のところは少し言葉が強いという気がする。日本の歴史を振り返ってみても、今のよう核家族で、本当に子どもが家庭の中だけで育つという歴史はすごく浅く、子育て自体は社会的な役目と考えている。いろんな人に支え、支えられ、子どもも親も育つと思っていたので、子どもが家族を求める気持ちにしっかり向き合うということになると、これから子育てをしていく若いお母さんたちなどにとっては少し負担が大きいのではないか。子育ては、もう少し広くとらえた表現に変えたほうがいいと思う。

「家庭」のところで、「しつけをする」という言葉が入っているのが、非常によいと思う。今はとにかく幼稚園や保育園においてしつけをお願いしますなどとなっている。何かしつけを放棄されたような家庭内容のところがあるので、親に対して「しつけをする」というこの文言が、非常に重みがあっていいと思う。

また、「子どもを育てる 10 か条」というのは、行政が作ったのではなく、平成 15 年に一般公募して、その中から選考委員会が選んで作ったものである。だから一般の、子育てしているお母さん方が出した言葉であるから、なおさら、身近に感じておられるのではないか。この 10 か条を大事にしてもらいたいと思う。

(地域に関する視点)

「連携」のところは、10 年後と考えた時に、「子どもを育てる」というより、「子どもが育つ」とか、子ども自身が自ら育つ力というのを、大人や地域や社会が支えるのだと考えると、もう少し表現が変わったほうがいいのではないかと思う。

(その他の視点)

家庭、地域社会、そして学校の3者が、人づくり、まちづくり、ものづくりに励んでいくことによって、1つの教育の大きな柱になるのではないかと。全市をあげて教育に携わっていけるというような形で、ぜひこの会議から意見をしていきたいと思う。

「仮説、私のラベリング論」だが、どんな人も、ものの見方、考え方に偏見、偏りというものがあると思っており、バランスのいい食事を取り、好き嫌いをなくしていくということが、1つの行動なり、考え方の偏見、偏りにつながらなくなると思う。

北九州で育つ子どもたちが、将来日本を動かす立場になることで、米100俵ではないが、北九州にもまちづくりの中に大きく影響を与える若者ができてくるのではないかと。

タイトルについて、「北九州市が目指す子どもの未来をひらく教育」というのは、基本的には賛成だが、少し表現を変えてみてはどうか。地域に根差した特色のある長野県の教育は、信濃教育として戦前から日本の教育をリードした歴史があり、「信濃教育」というのは固有名詞化している。この信濃教育に匹敵するような子育て・教育日本一を目指す北九州市の教育を、「北九州教育」とまとめてみたいような気がする。この九州で北九州の教育が全国に発信できるような中身にしたい。

「子どもの未来をひらく」という表現は素晴らしいと思っている。「子どもの未来をひらく」という、この具体的な内容をどう考えるか。私は、基本的には家庭、学校、地域、三位一体で、子ども一人ひとりの心身共に健やかな成長を促進し、有為な人材を育成する教育。一言で言えば、これはやはり自己実現ではないかと考えている。

地域、家庭、学校が共同体として子どもを育てていくということは、多くの委員が賛同すると思う。これをどう見せていくかというところが議論のあるところだと思う。

学校が上とか下とかならずにみんなで支える、地域社会も家庭も学校も子どもをみんなで支えるというほうがいいと思う。

家庭・学校・地域が3つの輪になって支え合っていかなければいけないというのは、そうだが、やはり行政の観点で言うと、学校とか地域には、教育委員会を通して指導はできるが、家庭については指導というのは難しいと思う。各家庭によって考え方も違う。家庭についてはスローガン、目標に過ぎない感じになり、対応が難しいと思う。

子どもを育てるのは家庭で、学校は学ばせるところである。その点をきちっと分けて考えたほうがいいと思う。子どもは家庭でしつける。学校は教え、学ぶところである。

家庭と学校と地域は別々のものではなく、全部一緒に同じように思いを一つにしていくようなものなので、家庭と学校と地域が同じ形でバランスよく立ったらいいと思う。

P T Aでも「子どもを育てる10か条」は常に唱和をして、いつも皆さんで確認し合うような形で、家庭でできることを、親ができることをとということでもいつもさせていただいている。だから、そのことも少し加えてほしいと思う。

総論と各論がうまく一致するような形のイメージづくりができればいいと思う。

【北九州市の目指す子どもの未来をひらく教育（全体像、意見・論点整理について）】

（「１．確かな学力と体力」に関する視点）

体力アップの基礎は、まず足腰を強くすることが大前提と考える。児童がのびのびとした遊ぶ環境を北九州市内に提供することが一番大事なことではないか。

幼稚園時から礼儀作法を覚えられるよう、教育課程（主要科目）として取り入れることが必要と考える。礼儀作法を覚えることで健全なる肉体に健全なる精神が宿り、一方で体力アップにもつながることになると思う。週に１回、約１時間武道教育があってもよいのではないか。

あまりスポーツが好きでない子どもに受け入れられる体制づくりも必要。案として、毎日２回程度、両腕を上げたり足を広げたり正確なラジオ体操をする。また、腕立てをして、鉄棒にぶら下がる、これらのことについてもっと知恵を絞ってみてはどうか。自然の森などでアスレチックをするなどの体力アップと精神力につながる施策を考えてみてはどうか。北九州では教育を通して、体力づくりをはじめ、精神力を養い、また、応用力の育成などを実行できる、という形にできればと思っている。

教育者の器量、保護者の考え方、子どもの判断力、勉強する環境等はすべて平均以上の状態なら、確かな学力を学び、学力アップもできると思う。物事を平均レベルにするのが教育者の従来のある在り方で、そこを根本的に変える教育の在り方、その子どもの利点を磨く、教え諭すと、日本一の確かな学力になると思う。

現代社会にマッチした教育の在り方の研究も必要。中学校から個々人の将来の在り方を考える教育課程を設け、その方向に向かう精神力と学力、また、応用力を身に付けさせることを目的として、日本のこれからを担う若者を育てていくことが日本一の学校教育の在り方だと思う。

「ワークライフバランスの推進」には、「仕事とプライベートのバランス」などの注釈が必要。子どもに早寝・早起き・朝ご飯も含め、家庭生活を確保する時間を与えることが非常に重要。企業や保護者に補助金などを渡し短時間労働などができるシステムを行政として考えるべきである。仕事に子どもを合わせるのではなく、子育てに仕事を合わせるぐらいの気持ちがないと教育はうまくいかないのではないか。

また、「病気を防ぐ習慣づくり」というところは、「病気を知り、防ぐ習慣づくり」にしてもらいたい。北九州市の小児科医会は、学校教育の中で授業に入り取り組んでいくことも視野に入れている。

「確かな学力と体力」の学力の方向性に「向上のための取り組みの推進、継続的な授業改善」とあるが、「改善」だけでなく「授業の充実」という言葉を入れてもらいたい。読書活動の充実が「確かな学力と体力」から「学校の力をさらに高める」に変更され、学校図書館の充実だけになっているが、読書教育の充実が必要だと思う。本を読む、それが言葉の力、言語力などに直結していると思うので、「確かな学力と体力」に読書教育の充実を復活させてもらいたい。

（「 2 . 子どもの特性を伸ばす 」に関する視点）

個性や特性を伸ばす教育としては、保護者のしつけ、家族のしつけ、地域の一般的な風習および考え方、教育者の資質と子どもの特徴を伸ばす教育の在り方が重要。人は一生を歩く上で必ず何かの使命をもって、この世に生を受けていると思う。子どもは一番よいところで優先的に伸ばす教育が必要と考えている。

北九州のマイスター認定者は 30 名いるが、共通して言えることは、一生を通じて粘り強くものづくりに頑張られた方々である。話題にすることは、熱意のある人、応用力のある人、仕事にほれる人、大事にしてもらったら立ち上がる人、世の中に役立つ行いをする人、そのような遺伝子を受け継いだ人が、未来の北九州の子どもを育てなければならない義務を負っているということである。技術者の DNA は、未来まで受け継がれて、日本の技術が、世界が必要とするよう自然と流れていくことを確信し、期待をしている。

（「 3 . 学校の力をさらに高める 」に関する視点）

モンスターペアレントについては、親はしつける権利と育てる義務、学校は学ぶところと学ばせる教育者、その区分をはっきりし、子どもとの会話を十分行う教育、教師であることを選定し、この問題の因果を断ち切らなければならないと思う。

優秀な教員の確保と学校長を中心とした学校の経営力の強化という言葉があるが、基本的にはやはり、学校というのは学校長が中心だと思う。ことさら強調しなくても、本当の意味で校長が従来のかちんとした学校経営の視点を持って、目線が子どもと家庭と職員にいけば、学校はうまく回ると思う。

「学校長を中心とした」という表現を「学校の経営力の強化、組織力の向上」という形で学校長を中心というのをもう少し開かれた形でやっていく方向もあるのではないかと。校長と教員、子どもがうまくいっている学校はいい。組織力というか、みんながうまく助け合いながらやっている。「組織力の向上」は、ぜひ載せておいてもらいたい。

また、「教員研修の充実」については、ぜひ、「教員のカウンセリングマインド教育の充実」ということを入れてもらいたい。

「教員一人ひとりの能力、学校の組織力を高め、学校が本来もつ力を発揮させる」とあるが、裏返せば、今、学校は本来のもつ力を発揮していないと捉えられかねない。「学校の組織力を高め、学校としての力を発揮させる」など、表現に工夫をしてもらいたい。

（「 5 . 心の育ちの推進（青少年の健全育成を含む）」に関する視点）

心の育ちの推進からいじめの撲滅のために、北九州市費での専門講師配置事業を行う必要があると思う。いじめが起きた場合には徹底した解析および分析をすることが重要。教育委員会にいじめの専門家をおいて、徹底した最後まで原因追及と結果を出すことの方向性により、いじめ撲滅の効果が出ると信じている。

非行防止活動の推進としては、勇気の大切さを教えること、自制心の勇気、困った人を助ける勇気、我慢する勇気、どんな困難が降り掛かろうともくじけない、人に愛情を持

つ勇氣、何事も最後まで頑張る勇氣、自分のこの世に存在する祖先の加護に対する敬意と義務の勇氣、それが欠如している。

心に響く道德教育の推進としては、日本は、昔は保護者たちが人の生き方と個々の経験によって編み出されたよい教えを、言葉で教えていた。私が考える道德の精神として必要なことは、正義、勇氣、仁、礼儀、誠。現在の道德教育は内容が非常に多く、子どもや親も理解できないのではないか。

不登校に対しては、親が手塩に掛けて子どもを育てる、乳幼児のしつけが非常に大事である。「三つ子の魂百まで」のたとえ通り、親の責任は重大で、今後、子どもが生まれる新しい親がしっかりと幼児のしつけをすることが重要である。

不登校・いじめでは、「スクールソーシャルワーカー等支援体制の充実」となっているが、制度は始まったばかりであり、一方、スクールカウンセラーは、中学校の全学校、小学校にも配置されているので、スクールカウンセラーという言葉に変えてほしい。

また、「就学前の家庭、幼稚園・保育所と小学校の教育の連携」は、非常に重要である。

さらに、「ノーマディアデー等の取り組みの検討」については、この会議で1つ目玉みたいな感じでできないか。例えば月のうち1日は休養日、学校も休みにして、親子とも、テレビは観ないで一緒に過ごそうとか、それくらいのことがあってもいいと思う。

全体的に見ても、どこにも「命」という言葉、あるいは「命の尊さ」という言葉が出てこない。「自尊心」、「他を思いやる心」の中に含まれているのかもしれないが、言葉としてはあったほうがいいと思う。

「規範意識の醸成」(問題行動を繰り返す児童・生徒に対する毅然とした指導とサポート)の表現では、問題行動を繰り返す児童は規範意識が欠如していると受け取られかねない。それだけではないと思うので、表現としては不十分ではないかと思う。

(「6．特別支援教育の充実」に関する視点)

「関係機関と連携した公立幼稚園における特別支援教育の充実」では、入り口のことは幼稚園・保育所とその1つ上にも書いてあるが、地域で生活していくということを強調するならば、就学前から卒業後までの指導支援体制の充実などの形であるべきと思う。体制などのことはよく書いてあるが、やはり、そのためには個の養成、指導の徹底や、教師の充実などの項目がひとつ起きてこないといけないのではないか。

(その他の視点)

第1回会議で委員が「誰のための学力、何のための学力か」という質問をしたが、北九州のための学力なのか、その学力がつかないと自己実現できないという意味なのか。そういう議論が1～6の視点において、まだ十分できていないところがある。

表の作り方として、責任体制で家庭、地域、学校とはっきり分けられないが、家庭の領域の部分はどの施策なのか、特に学校が責任を持つこと、特に地域が責任を持つところはどこなのか、この表の横軸で分かれていたら少し見やすくなる印象を持っている。